

Title	J.J.ルソーとE.デュルケームにおける根本思想： ルソー『エミール』とデュルケーム『道徳教育論』を主題として
Sub Title	Essai sur la pensee fondamentale de Jean-Jacques ROUSSEAU et d' Emile DURKHEIM : avec reference a "Emile" de J.-J. Rousseau et a "L'Education Morale" d'E. Durkheim
Author	仲, 康(NAKA, Yasushi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1983
Jtitle	哲學 No.77 (1983. 12) ,p.55- 82
JaLC DOI	
Abstract	D'abord, mon sejour de deux ans du 1 ^{er} avril 1981 au 24 mars 1983, a Geneve, Suisse, a Bordeaux et a Epinal, France, s'est bien passe grace a l'amabilite des gens qui habitent ces trois villes. Mes remerciements vont en particulier a M. le Maitre Ch. OCHSNER et a ses proches, a M. et M ^{me} H. BRAND, a M. et M ^{me} M. L. DUFAUX, a M. et M ^{me} Ch. HEIDSIECK, a M ^{me} C. HONDA, a M ^{me} N. PERRET, aux professeurs a l'Universite de Geneve : MM. Ch. LALIVE d'EPINAY, P. FURTER, R. GIROD et J. KELLERHALS, aux professeurs a Universite de Bordeaux II : M M. J. WITWER, H. BOIRAUD, M. BROSSARD et F. CHAZEL, a M. le Professeur R. JAVELET a l'Universite de Strasbourg, a M. le professeur M. MAFFESOLI a l'Universite de Paris V, et enfin a M. T. TODOROVIC au Japon, pour leur aide et leurs conseils. On sait que Rousseau a ete un des grands penseurs sociaux du XVIII ^e siecle et que Durkheim a ete lui aussi un celebre sociologue au debut du XX ^e siecle. Puisque leur situations historiques et sociales ont ete tres differentes, on ne peut pas simplement comparer la pensee de Rousseau avec celle de Durkheim. Neanmoins, quand on considere en profondeur la pensee fondamentale des deux grands penseurs, on y trouve un point commun : c'est leur conscience de crise de leurs epoques respectives. Il y a un petit lac sauvage appele Bienne au nord de la ville de Geneve. On y trouve une ile tres fine et longue a l'instar d'une peninsule. C'est l'ile de St.-Pierre. Dans cette ile se trouve un hotel ancien. Une fois je m'y suis rendu en compagnie de mes amis genevois. Nous avons trouve au premier etage les deux chambres oa Rousseau avait ecrit autrefois "Les Reveries du Promeneur Solitaire". C'est alors que nous nous sommes rappelles le visage et l'oeuvre de Rousseau et que nous avons eprouve le sentiment du respect pour les lieux. Par ailleurs, lors de mon sejour a Bordeaux et a Epinal, je pensais souvent a Durkheim en flanant tout seul dans les belles rues de ces vieilles villes francaises. Cet essai consiste en quatre chapitres suivants : 1) quel est le sujet de l'essai ? 2) les concepts de Nature et de Societe chez J.-J. Rousseau. 3) les conepts d' Education et de Societe chez E. Durkheim. 4) conclusion.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000077-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

J.-J. ルソーと E. デュルケームにおける 根本思想

——ルソー『エミール』とデュルケーム
『道徳教育論』を主題として——

仲

康*

Essai sur la pensée fondamentale de Jean-Jacques ROUSSEAU et d' Emile DURKHEIM

——avec référence à “Emile” de J.-J. Rousseau et à
“L’Education Morale” d’E. Durkheim——

Yasushi NAKA

D’abord, mon séjour de deux ans du 1^{er} avril 1981 au 24 mars 1983, à Genève, Suisse, à Bordeaux et à Epinal, France, s’est bien passé grâce à l’amabilité des gens qui habitent ces trois villes. Mes remerciements vont en particulier à M. le Maître Ch. OCHSNER et à ses proches, à M. et M^{me} H. BRAND, à M. et M^{me} M. L. DUFAUX, à M. et M^{me} Ch. HEIDSIECK, à M^{me} C. HONDA, à M^{me} N. PERRET, aux professeurs à l’Université de Genève: MM. Ch. LALIVE d’EPINAY, P. FURTER, R. GIROD et J. KELLERHALS, aux professeurs à l’Université de Bordeaux II: MM. J. WITTWER, H. BOIRAUD, M. BROSSARD et F. CHAZEL, à M. le Professeur R. JAVELET à l’Université de Strasbourg, à M. le professeur M. MAFFESOLI à l’Université de Paris V, et enfin à M. T. TODOROVIC au Japon, pour leur aide et leurs conseils.

On sait que Rousseau a été un des grands penseurs sociaux du XVIII^e siècle et que Durkheim a été lui aussi un célèbre sociologue au début du XX^e siècle. Puisque leur situations historiques et sociales ont été très différentes, on ne peut pas simplement comparer la pensée de Rousseau avec celle de Durkheim. Néanmoins, quand on considère en profondeur la pensée fondamentale des deux grands penseurs, on y trouve un point commun: c’est leur conscience de crise de leurs époques respectives.

Il y a un petit lac sauvage appelé Bienne au nord de la ville de Genève. On y trouve une île très fine et longue à l’instar

* 慶應義塾大学文学部教授 (教育社会学)

d'une péninsule. C'est l'île de St.-Pierre. Dans cette île se trouve un hôtel ancien. Une fois je m'y suis rendu en compagnie de mes amis genevois. Nous avons trouvé au premier étage les deux chambres où Rousseau avait écrit autrefois "Les Rêveries du Promeneur Solitaire". C'est alors que nous nous sommes rappelés le visage et l'oeuvre de Rousseau et que nous avons éprouvé le sentiment du respect pour les lieux.

Par ailleurs, lors de mon séjour à Bordeaux et à Epinal, je pensais souvent à Durkheim en flânant tout seul dans les belles rues de ces vieilles villes françaises.

Cet essai consiste en quatre chapitres suivants :

- 1) quel est le sujet de l'essai ?
- 2) les concepts de Nature et de Société chez J.-J. Rousseau.
- 3) les concepts d'Education et de Société chez E. Durkheim.
- 4) conclusion.

- 1) 問題の所在
- 2) ルソーにおける自然と社会
- 3) デュルケームにおける教育と社会
- 4) 結 語

1) 問題の所在

デュルケームが生前大切にしていた句に、つぎのようなものがある。

「もしあなたが自己の思想を円熟させたいと思うならば、偉大な師についての精緻な研究に自己を没頭させ、その最も深奥なメカニズムの中で、一つの体系を分解してみなさい。」⁽¹⁾

デュルケームにとって偉大な師が、当時のフランスの新カント学派の Ch. ルヌーヴィエであったとすれば、本稿をあらわすにあたって、筆者の偉大な師はデュルケームであり、ルソーである。

20世紀の初頭にあつて、A. コントの衣鉢を継いで、その社会学の実証化に鋭意専心したデュルケームは、当時その斬新な研究方法に対して、各方面から厳しい批判や攻撃にさらされてきた。とくにユダヤの血統を受け継ぐデュルケームに対して、カトリック系の学者や政治家から、かれらの

誤解に基づく根拠なき批判が絶え間なかつた。⁽²⁾

ルソーもまた、18世紀の後半において、その著作、『エミール』に対する賛否両論が、当時の思想界を賑わしたのであった。とくに『エミール』におけるルソーの教育理念とその所論が、当時のカトリック教会を怒らせ、かれに対する告訴がなされるまでになった。またルソーの奇行や実践が、かれの理想を表明した一連の著作の内容と著しく対立していたために、かれを偽善者として厳しくとがめる者も少なからずいた。

これらの歴史的事実があるにもかかわらず、20世紀後半の今日、社会学者としてのデュルケームに対しても、社会思想家としてのルソーに対しても、それぞれきわめて高い評価が与えられているのは何故であろうか。

その最大の理由は、デュルケームにしてもルソーにしても、かれらが1世紀または2世紀先にわれわれが当面するであろう諸事態を予測していた、ということである。かれらの思想の根底に、人間と自然、個人と社会にかかわる根本問題に対する鋭い省察、何時の時代にも問われる「人間とは何か」への深い洞察が伏在していたからである。

周知のように、デュルケーム社会学において最も鮮明に語られているのは、集合意識の諸個人に対する諸機能である。それは前者の後者に対する外在性・超越性・優越性・先在性の四つの特質によって表明されている。デュルケームの多くの表現形式や過度の強調から、全体としての社会や集合意識が、諸個人や諸個人意識に対して、存在論的意味で超越的な一実体として存在しているかのような印象を受ける。しかしかれの意図はそこにあつたのではない。デュルケームを、これまで多くかれが評価されてきたように存在論的社会実在論の一提唱者として、その範ちゅうに入れるか、あるいは、G. ギュルヴィッチが、デュルケームに対する一連の批判論文の中で指摘してきたように、⁽³⁾本来社会学における実証主義を標榜したデュルケームが、その論旨展開の過程で、社会的なるものや集合意識を至上善 (le Bien suprême) として神格化し、実証的経験科学としての社会学の範

域を超えた形而上学への道を窮極のところ歩むに至ったとみるか、あるいはまたこれらの見解と逆に、H. アルパートが指摘したように⁽⁴⁾、デュルケームを存在論的社会实在論者とみる見解を皮相的なものとして斥け、関係論的(または結合論的)社会实在論者として評価するのか、それらは、デュルケーム学説の研究家が、デュルケームの諸著作のどの文脈に注目して、それらを例証としてとりあげるかによって、デュルケームに対する評価が大きくわかれるものなのである。

20世紀後半になって、日本や米国において、デュルケーム学説に対する再評価が盛んに行われるようになってきた⁽⁵⁾。それは一つには、構造・機能主義の先駆者としてのデュルケームの実証的アプローチの仕方に対して、二つには、かつて J. デュヴィニョーが指摘したように⁽⁶⁾、当時のフランス国民の精神作興と国家の再建を意図した道徳の使徒としての人間像に対して、新たな問題提起がなされてきたからであった。それとこれらのデュルケーム学説の再検討や再認識の動向は、いずれも A. キュヴィリエの『フランス社会学の方途』⁽⁷⁾の題名をまつまでもなく、20世紀後半から21世紀にかけて、社会学の在り方を模索する活発な論旨の展開と、高度に産業化された社会から脱工業化社会に向けて、社会と個人の問題を根本から再検討して、人間の人間としての本来的な生活を取りもどそうとする、従来の社会学の領域を超えた、広い意味での「人間学」の樹立の動向と密接にからみあっている⁽⁸⁾。

筆者もかねてから、デュルケームを単に実証主義に立脚した近代社会学の創立者の一人としてではなく、そしてまた、社会の個人に対する外在性・優越性・超越性・先在性を強調した社会实在論者や社会の個人に対する決定論を力説した学者の一人として評価するだけではなく、もっと広い視野から、すなわちわれわれの当面する現代的危機との関連から、デュルケームの問わんとした真意、筆者の言葉をもってすれば、「社会における人間とは何か」の基本的問いかけを、デュルケームの思想の中にみいだそう

と努力してきた。⁽⁹⁾ その意味でこの論稿の冒頭に掲げたデュルケームからの引用句、「優れた師について、その最も深奥のメカニズムの中であって、師の学的体系を分析せよ」は、筆者にとっても研究の第一の指針であった。だがそればかりではない。

周知のように、デュルケームが『社会学的方法の諸規準』の中で、第1の命題として掲げたものは、「社会的諸事実をものとして処理せよ」であった。その意味するところは、慣習や道德、法を主題として社会の存在様式や作為様式を物質的次元においてとらえるということではなく、できるだけ客観的態度を持ってアプローチしようとする、近代科学の基本精神を説いたものであった。今日「新しい科学論」⁽¹⁰⁾の中で、「科学における客観性とは何か」が改めて問われているけれども、デュルケームの主張は、研究者が対象に直面した際の、できる限りの先入見や臆見の排除を意味していた。それは M. ヴェーバーの「神々の闘争からの解放」に共通するものがあつた。筆者もまた、第2の指針としてデュルケームの第1命題にしたがって、デュルケームの根本思想を解明するにあたって、デュルケームに関する既成の固定観念や先入見にとらわれることなく、それらからの脱皮に留意したい。

デュルケームの一連の諸著作、『社会分業論』から『宗教生活における原初的形態』を繙いてみると、たしかに至るところで社会の個人に対する外在性・優越性・超越性・先在性が説かれている。オーストラリアの原住民の社会生活を主題とした「宗教論」の中では、神の具現化した姿が社会であるとまで強調され、集合表象や集合意識は、諸個人表象や意識よりもより客観的であり、後者に対して、前者がより上位の優れた表象や意識としてとらえられている。したがって、ギルヴィッチが、デュルケームをして現代的な視座である「視界の相互性」と全体社会を「深さの層」においてとらえようとする近代社会学の先駆者の一人として、デュルケームを高く評価しながらも、集合意識を至上善としたデュルケームの立場を、

社会学に対する形而上学への還元化であると厳しく批判したことは当然首肯できる。

またかつて哲学者今井仙一が、社会と個人の問題に関して、G. タルド的な見方とデュルケーム的な見方とを対比しつつ、それら両者を超克する第3の立場として、H. ベルクソンの「閉ざされた」道徳・宗教・社会と「開かれた」道徳・宗教・社会に立脚した哲学を掲げた点も理解できる。⁽¹¹⁾

ベルクソン哲学においては、個人に関して「表層的なわれ」(le Moi superficiel) と「深層的なわれ」(le Moi profond), すなわち社会化に従属する受動的なわれの部分と、社会化を超克し、既存の社会体制や価値体系を打破しようとする能動的なわれの部分が問題とされ、とくに後者の側面が強調されてきた。

では、ギユルヴィッチのデュルケーム批判にみられるような点や、ベルクソンの主張が、デュルケームの思想の中で、果して閑却され欠如していたであろうか。筆者は必ずしもそのようにはみていない。

その理由は、まず第1として、デュルケームが社会変動の根本要因として、「内的社会環境」における人と人との力動的関係の変化や、かれが顕著な例として引用している哲人ソクラテスのような、個人の反社会的行為(かれのいう犯罪)の既存の社会体制に対する能動的行為を掲げていることである。

第2として、デュルケーム自身の生活史を繙いてみよう。社会学の存在理由を確立化しようとするデュルケームの関心事は、社会学固有の研究対象・領域・方法の模索にあった。そこでは、当時の有力な潮流であった社会学の生物学や心理学への還元化への極端な拒否があった。かれの『自殺論』における処理の仕方は、そのことを克明に物語るものであった。そして初期の労作『社会分業論』の中でかれの意図したものは、社会変動のメルクマールとして、「社会的分業」に注目し、高度に分業化した経済社会とそれに対応する職業道徳の必要性を説いたものであった。この研究はあ

る意味で、経済的な下部構造と道德という上部構造との接点を求めようとする、当時にとっては意欲的な試みであった。『道德教育論』や「宗教論」においては、高度に抽象的・人間的な道德・宗教という現象を、社会や集団という具体の場に引きおろして、これらを一つの経験的事実として、社会との関連のもとにとらえようとする、これもまた当時としては画期的な試みであった。デュルケームが今日高く評価される最大の理由の一つは、従来の研究視角や視座にとらわれることなく、斬新でオリジナルなそれらの提供にあった。それは明らかに、かれ自身の既成の学問的価値体系に対するレジスタンスの表明であり、この点において、デュルケームは当時のフランス社会における反社会的行為者であったといえる。

デュルケームの日常生活や政治とのかかわりあいはいかに如何であったろうか。デュヴィニョーやアルパートの指摘にもある通り、デュルケームの意図したものは、フランス国民における世俗的道德の確立にあった。それは、それまでのカトリシズムに立脚した宗教道德からの解放であり、人間の不条理からの脱却にあった。ドレフュス事件へのかれの関与も、この基本姿勢に基づくものであったといえよう。したがって、このようにみていると、アテナイ社会におけるかつてのソクラテスと同様、当時のフランスの学界や道德・宗教の世界において、デュルケームは断罪に処せられるべき存在であったことが容易に推察できる。要するに、かれの思想や行動が、学問の領域においても、日常世界のそれにおいても、当時のフランスにおいて反社会的行為そのものであり、既成の社会体制や価値体系をことごとく打破しようとするものであったといえる。

このように考えてみると、デュルケームを一方的に、個人の既成社会への適応化を強調した社会決定論者の一人として評価する皮相的な解釈に、筆者は大きな疑問を抱かざるをえない。デュルケームは、たしかに当時のフランスにおいて、学界においても日常生活においても、異端者であり反社会的行為者、すなわちデュルケームのいう「犯罪者」の一人であったと

みざるをえない。

そしてその意味では、18世紀末の偉大な社会思想家の一人といえるルソーもそうであった。

ルソーとデュルケームを同時にとりあげようとするこの小論では、警戒すべき一つの点がある。ルソーの活躍した時代とデュルケームのそれとでは、約1世紀以上の開きがあり、かれらの活躍した社会的・歴史的状況にも著しい相違がある。したがって、単純に両者の思想の中に、明確な比較の規準点を設定することなく、両者の学説を対比することは、危険な作業をとまなうことになる。それにもかかわらず、筆者があえてこの危険な作業を行なおうとする根拠は、一つには、フランスの社会学を語るにあたっては、コント学説の先駆者である啓蒙の思想家達や優れた社会思想家達の諸学説まで遡及しなければならないこと、二つには、デュルケーム自身、ルソーの思想に批判的でありながらも、ルソーのそれに、大きな示唆や啓発を受けていることにある。⁽¹²⁾

社会を諸悪の根源とみたルソーと、社会を神の具現化した姿とみたデュルケームとの間には、越えることのできない深淵が横たわっているように見える。しかし、果してそうであろうか。18世紀末、パリの華やかな社交界との接触に心身ともに疲弊したルソーの「人間とは何か」の問題提起と、20世紀初頭のフランスの混沌とした社会状況の中であって、「知性の開化」による人間の確立を意図したデュルケームの胸中にあったものとは、両者に共通するものがあるのではないであろうか。

本稿において筆者の意図するところは、実証主義に則って社会的諸事実の解明を主張したデュルケームの人間像の背後に、現実のより正しい判断に立脚しながら、新しい社会や道徳を樹立してゆく能動的な諸個人の確立化をはかろうとするデュルケーム本来の人間像をみいだすことができるのではないかということである。再びベルクソンの言葉を借りれば、「表層的なわれ」の奥に「深層的なわれ」を、デュルケームにみとめるこ

とはできないであろうか、ということである。

そしてそのことは、ルソーにも求められてこよう。われわれが『エミール』を繙いてみると、ルソー自身が「註釈」の中で断わっているように、前後の文脈の間に矛盾したものがあるし、また読者の立場からみれば、不合理で到底実現しえないものや、かれ自身の実践と余りにもかけ離れている主張を少なからずみいだす。まさに「表層的なわれ」としてのルソーは、よく伝えられるように奇行奇癖、狂気に近い人物であり、われわれの眼には一面において、華美な世界にあこがれ参与しようとし、他面において、そのような世界を軽蔑し、その世界から逃避しようとするアンビバレントなルソーの人間像が映る。しかし「深層的なわれ」としてのルソーは、自己の内面においてその矛盾に苦悩し、自己の内界の原形質のようなものそれ自体をイメージの中に表現したい、という衝動にかられた人間像として描きだされてくる。それは R. ダーレンドルフのいう「ホモ・ソシオロジクス」からの超克、現実の様々の拘束や鎖を断ち切った「全体的人間像」（可能なかぎり自由の契機をはらんだもの）、さらにいうならば、プラトンの「イデアの世界」への昇華を意図したものではなかつたらうか。

明らかに、ルソーが『エミール』の中に設定した少年「エミール」は、現実には存在すべくもないし、また過去にも存在しえなかった理想像としての少年であった。そしてエミールは、既存の社会体制を打破して新しい社会を作り出してゆく能動的行為者の姿として描きだされてくる。人間はなまじ知性を持ち駆使したが故に、人間同志の間に不平等が生じ、不幸になったと説くルソーが、エミール少年に対しては、完全な合理的精神、そして理性を持つ青年に育てようと努力している。かれもまたデュルケームと同様、知性の可能なまでの開化による新しい社会の創造を念願としていたのではないか。⁽¹³⁾ 否、むしろ歴史的には、ルソーのこのような根本理念が、デュルケームの思想に多大の影響を与えたのではないか。この小論における著者の問題の所在は、以上にあるといえよう。

注

- (1) H. Alpert, *Emile Durkheim and his Sociology*, 1961. 花田, 仲, 由木共訳『デュルケームと社会学』p. 14. S. 52.
- (2) J. Duvignaud, *Durkheim*, 1965.
- (3) G. Gurvitch, *Le Problème de la Conscience Collective dans la Sociologie de Durkheim. La Science des Faits Moraux et la Morale Théorique chez E. Durkheim.* いずれも, G. Gurvitch, *La Vocation Actuelle de la Sociologie*, 1950, 所収.
- (4) H. アルパート, 前掲書.
- (5) その主な著作を掲げてみれば, 以上のようなになる.
新堀通也『デュルケーム研究』S. 41.
尾高邦雄編『デュルケーム・ジンメル』世界の名著 47, S. 43.
宮島 喬『デュルケーム社会理論の研究』1977.
小関藤一郎『デュルケームと近代社会』1978.
佐々木交賢『デュルケーム社会学研究』1978.
中 久郎『デュルケームの社会理論』S. 54.
他に最近の論文として,
浜口晴彦「デュルケームのドレフュス事件体験」, 『歴史的文化像』所収, 1980.
夏刈康男「E. デュルケームの認識と実践的関心」, 社会学論叢 No. 80 所収, 1981.
米国の諸文献については, H. アルパート前掲書邦訳のあとがき参照.
- (6) J. Duvignaud, *op. cit.*
- (7) A. Cuvillier, *Où va la Sociologie Française?* 1953.
- (8) 1960年代後半からの, T. パーソンズを中心とする構造・機能主義的分析に対する各方面からの批判は, 現代社会学の動向を示唆するものといえよう. そしてそれらの試みに共通するものは, 従来の有力な立場であった社会学の自然科学への接近に対して, 哲学的視座の導入と日常生活におけるわれわれの再認識, 既存の社会体制へのレジスタンスにあるといえよう.
- (9) 仲 康「デュルケーム社会学における根本問題」, 『哲学』第39集, 1961, 所収.
- (10) K. Popper, *The Poverty of Historicism.* 久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困』1961.
K. Popper, *Objective Knowledge*, 1972, 森 博訳『客観的知識』1974.
Th. Adorno et al. *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie*,

1969. 城塚登他訳『社会科学の論争』1979.
 村上陽一郎『新しい科学論』1978, 『科学と日常性の文脈』1979, 『日本人と近代科学』1980.
- (11) 今井仙一『フランス哲学の主要課題』1940.
- (12) E. Durkheim, Montesquieu et Rousseau. 1953. 小関藤一郎, 川喜多喬共訳『モンテスキューとルソー』1975.
 E. Durkheim, La Pédagogie de Rousseau, Revue de Métaphysique et de la Morale, XXVI, 1919.
- (13) この点では, カントの『啓蒙とは何か』(岩波文庫)における, カントの啓蒙思想の真髄に通じる. それ故に, かつてカントが朝の散歩の途次, 『エミール』に深い感銘を覚えたのであろう.

2) ルソーにおける自然と社会

ルソーの『エミール』における現代的意義については, 既に前節において言及したが, これを要約すれば, 1) 現代社会と人間, 2) 教育と人間の諸問題にかかわるものとなるであろう.

第1に関して想起されることは, 今日, 高度な工業化, 合理化, 情報化, 管理化, 大衆社会化などの諸状況がもたらす弊害として, 非人間化の傾向が益々強まってきていることである. たとえば, 巨大な組織による大規模な生産方式や複雑な官僚制のもとにおける諸個人や, 大衆社会化状況におけるかれらは, ホワイトのいう「オーガニゼーション・マン」, リースマンのいう「他者志向型」の人間, ライクの「⁽¹⁾緑色革命」における「意識Ⅱ」のタイプの人間を作り出している. これらはいうまでなく, 人間がこれまで営々として築きあげ運用してきた諸制度によって, 逆に人間が疎外化される状況を, それぞれの角度から画いたものであり, その意味において, 現代は人間にとって危機的状況にあるといえよう.

しかしこのような事態は, なにも現代人によって初めて察知され, 警鐘が乱打されるに至ったものではない. 既に18世紀後半において, ルソーに

よって指摘されていた。『エミール』の冒頭に掲げられた有名な一節が、そのことを如実に物語っている。

ルソーによれば、創造主の手を出たときは、物すべて善であるが、ひとたび人間の手に移されると、物すべてが悪になってしまう。人間はある土地に他の土地の産物を生じさせようと無理したり、ある樹木に他の樹木の果実を結ばせようと工夫する。気候も風土も季節も人間の手にかかると、すっかりかきまわされてしまう。犬や馬そして奴隷までも、すべて不具にされてしまう。人間は一切のものをひっくりかえし、不具にして、その奇形を喜んでいる。それはある意味で、「化けもの」を愛しているのと変わらない。人間はなに一つとして、自然の造形をそのままにしておこうとはしない。人間そのものに対してさえも、自然のままにしておこうとはしない。そこでは、牛馬が人間に役立つよう飼育され調教されるように、人間もまた他人に役立つように鑄型にはめこまれる。あたかも、他人の趣向にまかせて剪枝される盆栽のようにである。

『エミール』冒頭のこのような一節は、この著作を貫流する根本思想である。つまりルソーによれば、一切の悪は人間の自然性に宿っているのではなく、それらはすべて、人間の作り出した社会を根源としている。人間はなまじ理性を持ち、これを駆使したが故に不幸になりつつあるのである。⁽²⁾

第2の教育と人間に関しても、同様のことが問われてくる。『エミール』はその副題にもある通り、教育に関するルソーの根本理念を、物語形式で展開したものである。したがってこれは、子供に対する実践的な躰けや、具体的な教育実践を説いたものではない。さらに筆者の理解によれば、『エミール』は、ルソーの単なる「教育論」や「教育原理」にとどまるものではなく、仮構の少年「エミール」を通じて、社会の変革を熱望するルソー自身の叫びを表明したものである。したがってこの著作は、ルソーの「政治論」であり、「社会変革論」といえよう。ルソーの他の著作『人

『間不平等起源論』や『社会契約論』が、正面から政治を取扱った著作であるとするならば、『エミール』は、父親としての著者が、「エミール」少年を教育してゆくその諸過程において、当時のフランスの政治体制や社会体制（とくに上流社会の）に、痛烈な皮肉を放ったものといえよう。そしてまたこれは、フランスの精神的・伝統的支柱であるカトリシズムへの重大な挑戦でもあったのである。

『エミール』を「教育論」の視座からとらえてみた場合、それは現代日本における教育の現状に対して、きわめて重要な示唆を提供してくれる。

ルソーによれば、われわれは子供というものを全然理解していない。子供について、現在のような（18世紀末のフランス上流社会における）誤った思想を抱えているかぎり、進めば進むほど、われわれは迷路に立ち入るのみである。賢人でさえも、大人の学ぶべきことばかりに専念して、子供がどんなことを学ぶ状況にあるのかを少しも配慮していない。あたかも、子供の中に大人を求めているようなものである。それは大人が、かつて自分が子供であったころのことを忘れていることに由来するのである。人間は成人になる前に子供であったし、そしてそれは自然の摂理でもある。子供と大人とは全く相違しているから、子供への教育は、子供の立場にあって、子供に出来ること、それだけをさせることに専念しなければならない。子供の能力を超えた教育を子供に無理に施しても、それはすべて無益であるばかりか、子供にとって有害ですらある。ルソーの「教育論」にとって、これは最も重要な一節であるとともに、現代のわれわれにとっても頂門の一針である。

『エミール』において、この少年を教育する教師（実は著者ルソー自身）が、そのために必要にして完全な諸特性を備えているものとして設定され（だが奇妙なことに、父と子の対話はあっても、その間に母親は登場してこない。ルソーは不幸にして、かれの生誕直後に母親が病死したから、このことは、ルソー自身の生涯を象徴しているのであろう。）、その前提のも

とに、独自の教育方法が具体的に展開されてくる。

ルソーにとって、この必要にして完全な教育の諸条件の設定は、ルソーが当時抱いていた理想の境地であって、教育の実践過程では到底実行しえないものが含まれている。したがって、エミールの意図するところは、教育実践の場に具体的指針を与えようとするものではなく、「教育とは何か」の本義を説くところにあつたのである。ルソーの真意は、当時かれが参与していたフランスの上流社会にみられる華美・虚飾に対する重大な挑戦にあつたといえよう。そしてこのことは、『エミール』の文脈のいたるところにみることができる。

『エミール』で展開されたルソーの根本思想は、かれの一連の著作を貫徹するものであり、それは一言にしていえば、「自然の摂理に従え！」であつたといえる。今日まで、ルソーの思想を「自然にかえれ！」によって表明する傾向がかなりみられたが、この標語は、必ずしもルソーの思想を正しく表明するものではない。ルソー自身、このような表現をどこにも用いていなかったからである。

既述のとおり『エミール』は、その副題にみられるように「教育について」であるが、以上の考察にしたがえば、この副題は「自然と社会について」の題目に代置することができる。事実『エミール』の全篇を通じて、ルソーの絶えず念頭にあつたものは「自然と社会」である。そしてこの二つの概念はいたるところで多義的に論じられ、そのために、一見物語り風の小説『エミール』を難解な哲学書にしている。筆者の考えでは、『エミール』その他の著作に展開されたルソーの根本思想を解明する鍵は、この「自然」と「社会」の両概念にあると思われる。

ルソーの意味する「自然」は、あまりにも人工的になり過ぎた大都会の諸状況に対する「大自然」や原始未開の「自然」を、しばしば指示していることもあるが、しかしかれの「自然」に対する真意は、『人間不平等起源論』や『言語起源論』にも展開されているように、歴史的にも現実にも

存在しておらない「自然」、つまりかれが理念型として抽象の次元で設定した「自然」であった。そしてルソーは、この理念型を規準として、実在型の社会をみてゆこうとした。それ故このような「自然」は、ルソーにとって一つの有力な、必要不可欠の操作概念であったのである。

このように考察してみると、ルソーのとったアプローチの方法は、近代社会科学のそれに先鞭をつけるものといえる。ただ両者の相違を強いて求めれば、ルソーが、かれの歩んできた日常生活における諸体験を基盤として、かれの独自の理念型を設定していったのに対して、後者のそれが、歴史的諸事実の厳密な実証的・経験的資料を積み重ねつつ、慎重に理念型を精練化してゆくところにあると思われる。しかしこれととも、「科学とは何か」、「客観性とは何か」の、科学の根本に立ち入った近代の科学論争にふれてくると、果たして両者の間に、どれ程の相違が指摘できるのか、両者は全く異質のものなのか、未解決の諸要因がそこに伏在しているように思われる。

注

- (1) C. A. Reich, *The Greening of America*, 1970. 邦高忠二訳『綠色革命』S. 49.
- (2) ルソー『不平等起源論』.

3) デュルケームにおける教育と社会

人間はなまじ理性をもち、これを駆使したが故に不平等な社会を建設し、不幸になった。そしてこの不幸の源泉は、人間の作り出した社会にあると、このように説くルソーにとって、社会はある意味で諸悪の根源として書き出されてきた。

これに反して、社会は人間にとって全知全能の神の具現化した姿であり、人間は集団や社会の中に育つことによって、初めて人間として完成さ

れることを力説したのは、周知の通りデュルケームであった。

デュルケームは、ルソーと相違して、実証主義の立場から、その講義録「教育論」の中で、「教育とは大人の世代の、子供の世代に対する方法的社会化」であり、教育の機能は「可能なかぎり迅速に、子供の心の中に社会的存在を植えつけること」にあると説く。

デュルケームによれば、社会のもつ既成の道德や価値体系は、子供たちにとって権威であるばかりか、かれらはこの権威を「望ましきもの」として心から希求するのである。「教育論」で展開されるこの思想は、その著『道德教育論』においても同様の展開をみる。

『道德教育論』の「道德的なるもの」の因子分析において、デュルケームが掲げたものは、1) 規律の精神（規則性と権威性の統合化されたもの）、2) 社会集団への愛着、3) 意志の自律性（または知性の開花）であった。デュルケームにとって、道德は当初、子供たちにとって権威として機能し、規律としてかれらに迫ってくる。このかぎりにおいて、道德は諸個人に対し外在的・超越的・権威的なものである。しかし、道德はいつまでも個人にとって外在的にとどまるものではない。教育によって道德は諸個人の心に内在化し、やがてそれは「良きもの」(le bien) としてはぐくまれ、かれらは、この「良きもの」を内面から積極的に希求するようになる。

「教育論」において人間の心は、デュルケームによって「社会的存在」と「個人的存在」とに抽象的に分離される。かれの説く教育は、人間の心の中における社会的存在の可及的迅速な育成を意味している。したがって、デュルケームにあっては、社会は人間形成にとって不可欠のものとなってくる。

教育を歴史的・社会的諸事実の一つとしてみると、たしかにデュルケームの主張する通り、社会は教育にとって大きな役割を演じている。デュルケームの『フランス教育思想史』は、このことを歴史的に実証しようとした大著であった。⁽¹⁾『社会分業論』を始めとして、デュルケームの全著作

は、現実の人間を歴史と道德の視座から眺めた作品、といっても過言ではない。デュルケームの教育に関する一連の講義録も、教育を歴史的現実の一つとしてとらえ、そこからかれの教育に関する著名な定義が生じてくる。すなわち教育とは、「社会生活に未熟な者に対して行なう成人の行為」であり、教育の目的は、「全体社会や、子供がそれぞれ運命づけられている独自の環境が子供に要求するところの、肉体的・知的・道德的知識を、子供の心の中に植えつけ育てること」にあるのである。

デュルケームの主張の通り、われわれは幼児期から、まず言語の習得を始める。そしてこの共通の言語・記号・身振りを通じて、将来、社会の一成員となるための基礎的知識を習得する。この意味において、教育は一面において、社会成員となるための、人々のある一定のレベルにおける画一化を目途して機能する。しかしながら教育は、このような保守的機能だけにとどまるほど単純なものではない。

デュルケームがその「教育論」において、個人の中に二つの存在を措定し、とくに教育による社会的存在の形成を重視したのに対し、後年 G. H. ミードは、self の中に me と I を設定する。⁽²⁾ me とは自己の心の中にある他人への配慮（気くぱり）に関係する自己を意味し、それは社会性をもつ self である。これに反して I とは、他人の中にはみることのできない、その個人しかもたない独自の self である。

デュルケームにおいては、すくなくとも「教育論」に関しては、社会的存在と個人的存在が抽象段階において分離されたものとしてとらえられているのだが、ミードにおいては、self の中で me と I とはたえず対話をくりかえしている。ミードによれば、me と I との作用・反作用の過程において、self は形成されてゆくのである。

したがって、教育が self の形成を意味するものであるならば、当然 me と I との対話のうちに教育は機能してくる。ミードのいう self の中の I の側面とその機能、バルクソンやギルヴィッチの主張する「深層的な

われ」(le Moi profond) と「深層的なわれわれ」(les Nous profonds) の考えは、P. フォーコンネのデュルケーム擁護の見解にもかかわらず、デュルケームの「教育論」の中にはみつけない⁽³⁾ことはできない。

それ故この点において、デュルケームの教育に関する定義「子供の方法的社会化」と、フォーコンネのデュルケーム擁護論をとりあげて、かりに「適応」という言葉について、フォーコンネにしたがって、デュルケームの場合、それは単に社会への消極的適応だけを意味するものではなく、積極的に社会変革の意味をも含むものとしても、フォーコンネのこの弁護は、教育概念に対する一種の「逃避」である。何故なら「適応」というかぎり、それはなによりもまず、現実に存在するもの(社会)への消極的従属の意味を超えるわけにはゆかないからである。また「積極的」といっても、その意味内容が明らかにされないかぎり、この見解を支持するわけにはゆかない。以上のような教育学者の側からの厳しいデュルケーム批判⁽⁴⁾も、見逃すことはできない。

しかしながら、デュルケームの「個人と社会」に関する問題が、この段階でとどまっていたかどうか、さらに広い意味での「教育論」において、このような批判が全面的に正鵠を得ているかどうか、ここには大きな疑問が残る。

注

- (1) E. Durkheim, L'Evolution Pédagogique en France, 1938. 小関藤一郎訳『フランス教育思想史』1966.
- (2) G. H. Mead, Mind, Self and Society, 1934. 稲葉三千男他訳『精神・自我・社会』1973. 他に村井・稲垣・仲・小泉共編著『倫理と社会の間』pp. 49~52. S. 49.
- (3) P. Fauconnet, La Préface dans "Education et Sociologie" d'E. Durkheim, 1920. 佐々木交賢訳『教育と社会学』S. 51.
- (4) 村井実『教育学入門』(下), S. 51, pp. 18~21.

4) 結 語

ルソーの根本思想に迫る鍵概念の一つが社会にあるとすれば、デュルケームのそれに迫る鍵概念も「社会」にあるといえる。

R. N. ベラーは、つぎのようにいっている。⁽¹⁾

デュルケームの著作において、「社会」以上に難解で多義的な用語はない。したがって、この用語の多義性を理解することは、デュルケームの思想の全容を把握することに等しい。しばしばこの用語は、デュルケームの思想の中であって、ある特定の社会集団を指示し、このかぎりにおいては単純明快であるが、他の場合には、「社会」は複雑多岐な意味を持ってくる。すなわちそれは、社会を構成する成員の単なる集団を意味しているよりもむしろ、諸個人を通じてかれら自身を実現化する、あらゆる種類の理念・信仰・感情の構成体を特に指示している。

ルソーにとって、『エミール』その他の著作で用いられた「社会」が多義的であり難解であるとするなら、上述のベラーの指摘にもある通り、デュルケームの「社会」もまた多義的であり難解である。⁽²⁾ ただ両者に共通する点は、両者ともそれぞれの生きた時代にあって、個人にとって「社会とは何か」を絶えず自己に問いかけ、模索していたことである。

さらに両者の「個人にとって」の個人を分析してみると、ルソーもデュルケームも、一様に「人間の理性」を問題としていたことである。ルソーはたしかに人間理性を一応は否定していた。しかし青年としての「エミール」はどうであろうか。きわめて合理的・理性的な知性豊かな青年であり、この青年が新しい社会を建設してゆく。⁽³⁾ ルソーの新しい社会こそ、『社会契約論』で展開される民主・合理に立脚する社会であった。⁽⁴⁾

青年エミールを通じてルソーの画いた理想の社会は、実は『エミール』の根本概念である「自然」または「自然状態」であった。

デュルケームはその論文「ルソーの社会契約論」の中で、以下のように

⁽⁵⁾
いう。

ルソーの理論を理解するためには、まず第1に、ルソーにとって、社会の諸状態の完全性の度合を測定する規準としての自然状態なるものが、如何なるものであったかを探求しなければならない。

ルソーのいう自然状態は、既に指摘したように、歴史上の自然ではない。かれによれば、「既に存在せず、またおそらく存在したこともなかった、そして将来も存在しえないであろうと推測される状態」である。したがって、ルソーの「自然人」は原始未開の人間ではなく、人間が社会生活から負っているすべてのものを人間から除去し、仮に人間がロビンソン・クルーソーのように、孤立したままずっと生活していたとするならば、なりうるであろう極限状態に還元化された裸の人間であった。

ルソーはこの極限状態の自然と人間をかれの思想の原点として、現実の社会や現実の人間生活を分析しようとしたのであった。

ルソーの『不平等起源論』の当初に掲げられた一節、「建造物の周囲の土や埃を一掃し、その建物の不動の基盤を探索してゆかなければならない。」にみられるこの「不動の基盤」が、ルソーのいう「自然状態」なのであった。

デュルケームは前掲の分析・批判論文の中でこのことに注目し、ルソーのこの思考方法は、デカルトの『方法序説』における「我思う故に、我あり」に通ずるものがあり、その類似性に驚嘆したのであった。

ルソーにとって、社会は自然に対立するもの、人間性の腐敗・墮落・退化の結果生み出されたものと理解されるべきであろうか？ デュルケームはここに問題を提起する。「ルソーの〈社会〉は、それ自体一つの悪であり、この悪を軽減化することはできても、完全に消滅させることはできないと推論されるべきであろうか？」と。⁽⁶⁾

たしかに皮相的にみれば、ルソーの世界にあって、社会と自然とは対立の極におかれている。しかしながら、少年「エミール」の世界にあって

は、この両者は窮極において一致するのである。

他方、デュルケームにおいて「社会」は如何であろうか？ ある場合には、ギェルヴィチの指摘したように「至上善」である。

デュルケームの画く理想の社会は、『分業論』においては、職業道徳に支えられた有機的連帯の社会であり、『自殺論』においては、アノミーなき社会である。

デュルケームが『自殺論』で注目した *anomie* なる用語は、周知のように、それまで死語であったものを初めてデュルケームが活用したものであった。しかし人間の心性のアノミー的状况については、ルソーによって既に『エミール』の中で、いみじくもとりあげられている。⁽⁷⁾ それは、人間の欲望の無限の増大化に対するルソーの警告であった。

『エミール』の第2編において、ルソーはつぎのようにいう。⁽⁸⁾

自然は直接的には、自己保存に必要な欲望とそれを満たすのに十分な能力だけを人間に与えていた。人間の本源的状態では、力と欲望の均衡がみいだされ、人間は不幸にならないが、潜在的な能力が活動し始めると、あらゆる能力のなかでも最も活発な想像力がめざめ、他のものに先行するようになる。この想像力は、善・悪いずれの事にせよ、われわれにとって可能な限界領域を拡大化させ、欲望を満たすことができる、という期待によって、さらに欲望を刺戟し、大きくしてゆく。ところが、当初は指呼の間にあると思われたものが、実際にはとても追いついてゆけない速さで、われわれの手から逃げていってしまう。捕えたと思う矢先に、それは姿を変えて、われわれのはるか彼方に再び現われる。……こうしてわれわれはその捕捉に疲れはて、いつまでも目的地に到着することができない。楽しみは、それを味わえば味う程、幸福がわれわれから遠ざかってゆく。反対にわれわれが自然の状態にとどまっていればいる程、人間の能力と欲望の差は縮少し、それ故に幸福から離れることが少なくなる。人間がみじめな状態にあるのは、あらゆるものに欠如しているときにあるのではない。不幸

は、ものを持たないことによって起るのではない。それを感じさせる欲望の中にあるのだ。

ルソーは『エミール』の第4編においても（おそらくかれの社交界における過去の苦い体験からであろう）、アノミー的状况についてふれている。⁽⁹⁾

これまで家族の者と友人にとり囲まれて、大事に育まれてきた青年が、突如、あらゆる種類のいやがらせ、裏切り、腹黒さをかかえた社交界に入ったとしよう。この社会の人は完全に仮面をかぶって生活している。青年にとって、気に入ったものはすべて、かれの心を誘惑する。他の人が持っているものはすべて持ちたいと思うし、すべての人を羨しく思い、どこへ行っても他人の上に立ちたいと思う。青年の心は虚栄によってむしばまれ、限りなき欲望がその心を占有するようになる。その欲望につれて、羨望と憎悪が生まれ、あらゆる貧欲な情念が、同時にのさばってくる。

『エミール』にみられるこのような記述は、デュルケームがルソーの一世紀後に、アノミーによって表明しようとしたことを克明に描写している。

最後にデュルケームの『道徳教育論』では如何であろうか？ デュルケームによれば、道徳に関する合理的・実証的科学が完成した暁には、われわれ諸個人は他律的であることをとどめ、道徳の世界の主人公となる。そのときわれわれには、自己の行為の理由について、可能な限りの明析な自意識と自律性が要求されてくる。

この段階に至れば、道徳的なるものは、単にある特定の行為を外的な拘束によって、遂行することにあるのではなく、それが個人の自由なる意思によって自発的に希求されるところに存在するのである。

そしてこのことを可能にする能力は、ルソーのいう「自己を完成させる能力」であり、「この能力は、種々の外的諸条件の援助によって、他のあらゆる能力を次第に発展させるものであり、われわれの中に（個人にも、社会にも）存在している」ものなのである。

デュルケームのソシオロジスムは、周知のように、社会の諸個人に対する外在性・超越性・拘束性・先行性から出発する。

しかしこのような発想の原点は、ルソーの思想の中にも既にみられる。ルソーの「ジュネーヴにおける草稿」において、社会とはそれを構成する個人的存在の特性とは別の固有の特性を持つ道徳的な存在である。それは恰も化合物がそれを構成する諸原素のそれぞれの特性とは異質の特性を持っているのに類似している。すなわち、公共の善も悪も、集合体における諸個人の善や悪の単なる総和ではない。公共の福祉は、諸個人の幸福の上に構築されるものではなく、かれらの幸福の源泉である。

デュルケームは、この文脈の中にかれ自身の思想の原点をみいだしている。かれはつぎのようにいう。

ルソーの「人類という言葉は、純然たる集合的観念を予測させうる」という指摘は、ルソーが社会的領域の独自性をきわめて鋭敏に意識していたことを示している。ルソーは、前者の領域を、諸個人的事実に比して異質の次元のものである、と明らかに認めていた。⁽¹⁰⁾

たしかにデュルケームは、社会の個人に対する優位性・絶対性を強調してきた。そしてそれ故に、個人の側からの探求を意識的に排除してきた。しかしながらそれは、かれの理想とする社会の建設のための一方策であった。

デュルケームによれば、教育とは既にみてきたように、「成人の世代の子供のそれに対する方法的（一定の秩序を持った）社会化」であった。このことから、J.ピアジェによる、「デュルケームは上・下の教育は指摘しても、子供同志の集団における切磋琢磨を閑却していた」という批判も、⁽¹¹⁾当然起りうる。

また、デュルケームが「教育論」において、既述のように人間存在を抽象的に「個人的存在」と「社会的存在」に分析しながら、この両者の関係についてふれてこなかったことも事実であった。

この点については筆者が既に指摘してきたように、ベルクソンの「表層的なわれ」と「深層的なわれ」や G. H. ミードの me と I, そして両者の絶えざる対話の内に「一般化された他者」が培かわれてゆくことに、われわれは多くの示唆を受ける。ミード理論によれば、パーソナリティの発展過程において、幼児期における素朴な「ごっこ遊び」や青少年期における複雑なルールを持つゲームが、self の中の「重要な意味を持つ他者」の成長・発展に重大な役割を果たすのであった。

ひるがえって、デュルケームの提唱した、成人の世代の子供のそれに対する教育の問題についても、その後のアメリカ社会学において、たとえば R. J. ハヴィガーストやエリクソン⁽¹²⁾の「発達課題」、T. パーソンズの「A・G・I・L」理論を個人のパーソナリティの成長・発展に適用した「L・I・G・A」理論の展開など、より精緻な分析をみることができる。

このように考えてみると、全体とそれを構成する個体の相互関係において、デュルケームが個体の側からの分析を等閑視してきたことは、かつてかれの高弟 M. モースも指摘している通り否定し難い。

しかしながら、そのことから直ちにデュルケームが個人の社会に対する逆の働きかけ、能動性を否定していたとみるべきではない。

既述の通り、デュルケームが社会変動の要因として、「内的社会環境」における la densité morale や反社会的行為者の出現を重視した点は、みのがしてはならない。

とくに後者に関して、デュルケームがアテナイ社会におけるソクラテスの反社会的行為をとりあげ、ソクラテスが新しいアテナイ社会を作り出す創造的行為者であった、とするかれの見解は、かれの論敵 G. タルドが、新しきものの創造として、天才による発明的行為を主張した見解と軌を一にするといえよう。もちろん、タルドとデュルケームの、社会と個人の問題に関する基本的立場の相違はあった。タルドが「生成」の社会に対する個人の能動的行為（「模倣」も、かれにとっては積極的行為であった）を問題

としたのに対し、デュルケームは「既成」の社会の個人に対する能動的行為を問題としていた。

また、デュルケームの「道徳性」の第3の要素としての「意志の自律性」（知性の開化）は、諸個人の発揮する合理的知性や自律的精神が、新しい道徳、新しい社会を創設してゆくことを意味していたから、このことは、同時代の哲学者 H. ベルクソンの「エラン・ヴィタル」による「開かれた」道徳・宗教・社会の出現が、聖人・賢者によってなされる、という主張と基本的に同じである。ただ、ベルクソンはその一連の著作において、規範科学と実証科学との連繋に腐心していたから、「エラン・ヴィタル」という形而上学的概念を鍵概念として提出したのに対して、デュルケームは実証科学としての社会学の建設に没頭していたから、そこに「反社会的行為」を重要な媒介概念としてとりあげたのである。

注

- (1) R.N. Bellah ed., Emile Durkheim on Morality and Society, 1973, R.N. Bellah, Introduction, IX.
- (2) デュルケームの「社会」は、集合意識、集合表象、全体的な政治社会や部分社会、そしてさらに、漠然とした抽象の社会などを示している。
- (3) ルソー『エミール』後半の部分、少・青年期の「エミール」参照。
- (4) イデオロギー的見地から、『エミール』は個人主義に立脚したものの、『社会契約論』は社会主義にと、その相違を指摘する学者もいる。
- (5) E. Durkheim, Le "Contrat Social" de Rousseau dans la Revue de Métaphysique et de Morale, t. XXV, 1918. A. Cuvillier, Montesquieu et Rousseau—Précurseurs de la Sociologie, 1953. 小関藤一郎・川喜多喬共訳『モンテスキューとルソー』1975.
- (6) E. Durkheim, op. cit.
- (7) 作田啓一『ジャン-ジャック・ルソー』1980, pp. 62~64.
- (8) ルソー, 今野一雄訳『エミール』上, 1976, pp. 104~105.
- (9) ルソー前掲訳本『エミール』中, 1976, pp. 42~43.
- (10) E. Durkheim, op. cit.
- (11) J. Piaget, 大伴茂訳『児童道徳判断の発達』1957.

- (12) R.J. Havighurst, *Human Development and Education*, 1953. 荘司雅子『人間の発達課題と教育』S. 33. E. H. Erikson, *Identity and Life Cycle, Psychological Issues*, vol. 1, no. 1, Monograph 1, 1959. 小此木啓吾訳編『自我同一性・アイデンティティとライフ・サイクル』1973. 菊池幸夫, 斉藤耕二共編『社会化の理論』第2章「発達課題」参照, S. 54.

最近におけるルソー関係の主な解説・批判書

『ルソー』世界の名著 第30, 平岡昇編, 1966.

『ルソー研究』桑原武夫編, 1968.

『ルソーとその時代』小林善彦, 1973.

『ジャン-ジャック・ルソー問題』カッシーラー. 生松敬三訳, 1974.

『モンテスキューとルソー』デュルケーム. 小関, 川喜多共訳, 1975.

『ルソー, エミール入門』吉沢昇他共著, 1978.

『ルソー, 社会契約論入門』小笠原弘親他共著, 1978.

『ルソー, 著作と思想』吉沢昇他共著, 1979.

『ルソーの合理主義』R. ドゥラテ. 田中治男訳, 1979.

『ルソー再興』新堀通也, 1979.

『ジャン-ジャック・ルソー』作田啓一, 1980.

『ルソーの人間観』沼田裕之, 1980.

他に, Genève での権威書として, J.-J. Rousseau, *Oeuvres Complètes*, I~IV, Bibliothèque de la Pléiade, 1969 があげられる.

あ と が き

ジュネーヴの北方にビアンヌ湖という小さな湖がある。ジュネーヴのレマン湖と違って、この湖の周辺には、自然のただずまいが数多く残されている。

その湖の南端に、地図で見ると細長い半島のようにみえる島が浮んでいる。人よんでサン・ピエール島という。湖岸と島は橋で結ばれ、外部の者が自由に訪れられるようになっている。しかし自動車での出入は、島の住民に限られており、踏切りのような遮断機があって、一般の訪問客は徒歩でしか島に入れない。観光地化、俗化を防ぐための周到な配慮は、心憎いばかりである。

島の端から端まで往復 10km, その北端に、ルソーがかつて長期滞在して『孤独

なる散歩者の夢』を草したところの、ひなびたホテル兼レストランがある。2階の二間続きの小部屋にルソーが往時起居したままの粗末なベッド・文机・洋服ダンス・料理用のかまどなどが、18世紀末の姿をそのままに伝えてくれる。過去の文化遺産の保存が周到になされており、いまにもルソーが奥の居間兼寝室から出て来て、われわれを迎え入れてくれるようだ。

ルソーの言葉に耳を傾けてみよう。

ビアンヌ湖のほとりは、ジュネーヴ湖のそれに比して、格段に自然でロマンティックだ。岩と樹木は湖岸に迫る。かといって、陰うつではない。

島には畑地、ブドウ畑、人家などは余りみかけないが、その代り自然の緑、牧草地、ひっそりと木々に囲まれたあずまやが点在している。光の鮮やかなコントラスト、そして起伏に富んだ丘がある。

幸いなるかな、この湖岸には大きな車道もなければ、この地を訪れる旅人も少ない。独り瞑想にふけて、自然の美を心ゆくまで堪能するのに誠に都合がよい。

静寂の中に内省は深まる。鷺の鋭い叫び声、小鳥どものさえずり、丘から流れ落ちる小滝の音を除いて！

筆者は2ヶ年の留学生活の中、ジュネーヴを根拠にして、フランス南西部のボルドーと北東部の小都市、人口4万のエピナルを訪れてみた。ボルドーはデュルケームがエコール・ノルマル・シュペリエールを卒業後、サンス、サン・カンタン、トロアなど（かれの古い履歴書には、もう一つのリセの名が記されていた。）のリセの哲学教授を経て、初めて大学の講師となったところである。ここで彼は15年間教鞭をとり、博士論文『社会分業論』と、副論文としてラテン語のモンテスキューに関する小論文を作成したのであった。

彼の奉職したボルドー大学は、すでに20年前に旧市街の手狭な校舎（その建物は市内に保存されている）から、郊外の誠に広大なキャンパスを有するボルドー大学（正確にはI～IIIの3大学よりなる）へと変貌していたが、デュルケームに関する貴重な職歴関係の資料は、ボルドー市立公園の傍らにあるジロンド県資料館に保存されていた。

デュルケームの生地エピナルは第2次世界大戦中、ドイツ軍の空爆によって市の半分を焼失したため、市の中心街にあった彼の生家は小公園となって、今はその根跡をとどめていない。しかし幸いなことに、元ストラスブール大学哲学教授、Abée, Robert JAVELET 氏宅を訪れた際に、同教授から寄贈を受けた氏自身の著作である、多数の写真をともなった“EPINAL à la Belle Epoque” (1969) によって、戦前のデュルケーム生家が写った写真を眼のあたりみる事ができた。

デュルケームの戸籍関係の資料は、エピナル市役所と史料館に大切に保存されていたし、彼およびラビであった彼の父親と縁故の深いシナゴグも、建物こそ新し

J.-J. ルソーと E. デュルケームにおける根本思想

くなっていたが、そのラビ夫妻は私の訪問を快く受け入れてくれた。

ルソー生誕の地ジュネーヴとデュルケームの初期に活躍したボルドー、そして彼の生誕地エピナル、私はそれらの地に、18世紀末や19世紀末葉から20世紀初頭にかけてのおもかげとかれらの思想の根源を、僅かながらも体感することができたように思う。

拙筆を擱くにあたって、昭和56年4月1日から昭和58年3月24日まで、ジュネーヴ大学とボルドー大学を中心とした海外在住を、塾派遣留学生として許可してくれた慶應義塾大学を第1に、第2に、2ヶ年の海外生活の間に多大の支援を与えてくれた、Monsieur, le Maître Charles OCHSNER, かれの両親, Monsieur et Madame Paul OCHSNER, かれの弟, Messieurs Pierre et Michel OCHSNER, かれの祖母, Madame Charles HOTZ, Genève の郊外 Versoix 在住の Monsieur, le Professeur Heinrich BRAND, Madame, le Professeur Liliane Rose Marie BRAND, Genève 大学学長, Justin THORENS, 社会学科主任教授, Christian LALIVE d'EPINAY, 社会学教授 Roger GIROD, 社会学教授, Jean KELLERHALS, 比較教育学教授, Pierre FURTER, Bordeaux 第2大学副学長, 教育学教授, Jacque WITTWER, 教育史教授, Henri BOIRAUD, 教育心理学教授, Michel BROSSARD, 政治社会学教授, François CHAZEL, Paris 第5大学社会学教授, Michel MAFFESOLI, 元 Strasbourg 大学哲学教授, Robert JAVELET, Epinal 市の地方紙, La Liberté de L'Est の編集者, Jean BOSSU, その他各位 (以下 ABC 順), Monsieur et Madame Takayuki ANDO, Mesdemoiselles Marie Françoise Lumica BETRISEY et Danielle BORER, Monsieur Fancis A. CLIVAZ, Monsieur et Madame Marie Louise DUFFAUX, Madame Germaine DUPARC, Madame FUJIMOTO, Monsieur et Madame Rikizô FUKAO, Monsieur et Madame Christian et Noriko ITO HEIDSIECK, Monsieur et Madame HONDA et Corinne MAILLER, Mesdemoiselles Keiko ITO et Setsuko ITO, Madame Ida JACOMET, Monsieur Kôichi KANO, Monsieur et Madame Ichirô KAWASAKI, Monsieur et Madame Peter et Béatrice KNUTTI, Mademoiselle Reiko KOYAMA, Messieurs Rokurô KURACHI et Hubert LEUBA, Mademoiselle Yoshiko MATSUI, Mesdames Madelaine NEESER, Kazuko MORI et Shigeko ONEYAMA, Monsieur et Madame Aitaka ÔSHIMA, Madame Nicole PERRET, Monsieur et Madame Jean PIERRE, Monsieur et Madame William et Frieda ROHR, Monsieur Jean-Claude SEYDOUX, Monsieur et Madame Kaoru SHIMIZU, Monsieur et Madame Donat et Kumiko STELLFELD, Mousieur et Madame Chôei TAKANO etc. に心から感謝の辞を捧げたい。